様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１４２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２４４８

研究課題名（和文）F.V.ディキンズ研究（３）ー評伝の完成ー

研究課題名（英文）A Study on an Early British Japanologist of F.V. Dickins

研究代表者
岩上　はる子（Iwakami, Haruko）

滋賀大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：４０１８４８５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は初期ジャパノロジストF.V.ディキンズの最初の評伝をまとめることを最終目標としている。既にディキンズ書簡の刊行および伝記調査を行ない、今期は日本文学翻訳を取りあげた。とくに『竹取物語』『方丈記』の成立過程を追い、南方熊楠の関与について考察し、その翻訳の特徴を明らかにした。またはじめてその全体像を欧州に紹介した『富嶽百景』全訳について詳細な検討を加え、英仏におけるジャポニスム関係者たちとの交流も明らかにした。ディキンズの翻訳の数々について、今日の視点から批判することは容易だが、めぼしい資料も方法論も確立されていなかで日本文学の翻訳に挑んだパイオニアとしての業績は高く評価される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
F.V.ディキンズは外交官サトウやアストン、外人教師チェンバレンに次ぐ日本研究者でありながら、国内外においてその研究はほとんど知られることがなかった。博物学的な視点から日本の言語・文化、歴史・政治、民族、自然・風土など多岐にわたる紹介がイギリスにおける日本研究に与えた影響は大きく、ディキンズの全体像を捉えることはきわめて意義深い。
　日本におけるディキンズは初めての国際裁判マリアルス号事件の弁護士、日本公使ハリー・パークスの伝記作者、世界的な博物学者・南方熊楠との交流が知られる。その日本紹介の視点は西洋人の＜まなざし＞であったが、東洋と西洋の出会いの特質を分析する一つの切り口となる。

研究成果の概要（英文）：This research project aims for the first critical biography of Frederick Victor Dickins. In the first stage, I co-edited F.V. Dickins' Letters to Ernest Satow, Kumagusu Minakata and Others (Edition Synapse, 2011). In the second stage, I carried out biographical research, focusing on his days in Japan and his most active days after his retirement.
　In the third stage, I carried out research on Dickins' translations of Taketori Monogatari and Hojoki. I have tried to analyze the translation methods of Dickins and probe into his relationship with Kumagusu Minakata. I also discussed the significance of Dickins' scholarly study of Hokusai, focusing on his translation and his commentary on One Hundred Views of Mount Fuji. It might be easy today to smile at Dickins' amateur status. However, it is important to note that he was the first translator of Hyakunin Isshu and the first person to publish scholarly work on Fugaku Hyakkei. His pioneering work deserves to be more highly evaluated.

研究分野：英語文学

キーワード：F.V.ディキンズ　サトウ　アストン　南方熊楠　ジャパノロジー　竹取物語　方丈記　葛飾北斎

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究で取りあげた F.V.ディキンズ（F. V. Dickins, 1838-1915）は、イギリスにおける初期ジャパノロジストの一人で、サトウ、アストン、チェンバレンにならぶ日本研究者の草分けでありながら、いまだに正当な評価と位置づけがされているとは言いがたい。研究の口火を切ったのはケンブリッジ大学教授 Peter Kornichi の編集による *Collected Works of F.V.Dickins* (7 vols., Editions Synapse, 1999)の刊行で、これによってディキンズの多大な業績に触れることが可能になった。筆者はコーニッキ教授との共編により『F.V.ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集』（*F.V.Dickins' Letters to Ernest Satow, Kumagusu Minakata and Others*, Edition Synapse, 2011）を出版し、ディキンズ研究の基礎資料を整備した。

広範囲にわたるディキンズの日本研究の概要を把握するために、第一期の書簡刊行その他の研究成果を土台に、第二期ではこれまで詳らかではなかったディキンズの日本における動向を追った。とりわけマリアルス号裁判における弁護士活動、帰国の経緯、その後の足取り調査など、評伝準備に必要な調査を行った。また『仮名手本忠臣蔵』全訳の成立、イギリスの日本研究におけるその意義と影響を明らかにした。第三期はこれまでの研究によって輪郭の見えてきたディキンズについて、日本文学の翻訳を中心に『竹取物語』『方丈記』訳を分析するほか、『富嶽百景』の最初の英訳者としてジャポニスムにいかに関わったかを検討することとした。

ディキンズの業績についての学術研究がほとんどないなかで、川村ハツエ氏『F.V.ディキンズー日本文学英訳の先駆者』（七月堂、1997）はコーニッキ序文においても言及される貴重な研究であり、筆者も道しるべとさせていただいた。一方、ポストコロニアル批評によるパラダイムの変換を受けて、現在では文化研究や翻訳論におけるめざましい展開もあり、従来の比較文学研究の手法を超えたアプローチが必要とされる状況にある。こうしたなかで、近年では国内外の文化研究や翻訳研究においてディキンズへの言及が見られるようになってきている。Aaron M.Cohen や川内有子氏などの『忠臣蔵』関連の研究、Peter McMillan による新訳『百人一首』における言及、ディキンズ訳『万葉集』に関するウェッブ・ジェイスンの論考など、最初の英訳者としてのディキンズの再評価の気運が萌してきたところである。

２．研究の目的

三期にわたって展開してきた研究の最終目標はディキンズに関する最初の評伝を完成することにある。イギリスにおける日本研究の草分けの一人であったディキンズの日本研究の全体像を捉えるとともに、幕末の旧日本との出会いから晩年の新日本への幻滅にいたる日本観の変容をたどることで、西洋の東洋に対する「まなざし」の特質を明らかにすることを目的としている。

ディキンズの日本研究は歴史、文化、日本語・日本文学、絵画、植物学、アイヌ研究など広範囲にわたる博物学的なものであった。サトウ、アストンを始めとする日本研究家の多くが外交官やチェンバレンなどのお抱え外国人教師であり、職業として日本研究に従事したのに対して、ディキンズは終始、在野の研究者に甘んじていた。しかし Japan Society, Royal Asiatic Society, *Nature* などの学術誌に論文を投稿したり、『アシニーアム』誌の日本関連書籍の書評を長らく担当するなど日本通の知識人として存在感を示していた。

二十代半ばに海軍軍人として来日し北斎漫画を目にしたことから旧日本に惹かれ、最初の三年余りの滞日期間に精力的に日本語の習得につとめ、『百人一首』を含む日本の古典文学の翻訳に乗り出したディキンズは、その後の弁護士活動、ロンドン大学事務局長などの本業の傍ら日本への関心を持ち続け、定年退職後に若き日に手がけた日本文学翻訳を再開するのである。今日残る『万葉集』長歌の翻訳を含むディキンズの仕事の多くが、晩年の十五年間になされたものであり、その影にはロンドンで知遇をえた南方熊楠との交流があったことも重要な意味をもつ。

ディキンズがその半生をかけてとり組んだのは日本の古代中世文学の翻訳であり、最終となる第三期ではこれまでの先行研究ではほとんど紹介に終わっているディキンズの翻訳について詳細に検討した。『竹取物語』『方丈記』の翻訳の成立過程を詳らかにすると共に、熊楠の関与の程度についても考察を加えている。またディキンズの『富嶽百景』英訳はきわめて早い時期になされたものであり、それまで部分的にしか伝わっていなかった『富嶽百景』の全体像を欧米に始めて紹介したという歴史的な意義は揺るがない。フランスにおいて産声をあげたジャポニスムは、ディキンズによってイギリスにおけるジャパニズムを招来させることにつながるのである。

ディキンズの日本研究の集大成となった『万葉集』の翻訳を含む『古代中世日本文学』（*Primitive and Mediaeval Japanese Texts*, 2vols, 1906）は、海外における『万葉集』研究史のなかで必ず言及される資料となっている。今日ではその翻訳や解説の誤りを指摘することは容易いけれども、これは日本の最大の詩歌集に関する初期の学術的研究書であったことは記憶されるべきものである。『万葉集』の外国語訳についてはオーストラリア人学者 August Pfizmaier、B. H. Chamberlain などの抄訳が知られ、また日本学術振興会が総力をあげて 1939 年に完成した英訳版などがある。『万葉集』外国語訳の歴史は、日本的な世界をいかに西洋世界に伝えるかというディキンズが立ち向かった古くて新しい課題への挑戦の記録であることに気づかされる。ディキンズの日本研究の位置づけには異文化摂取の広い視座からの展望が求められる。

初期ジャパノロジストとしてのディキンズの仕事の評価と位置づけを目的として始めた本研究は現在、非常な広がりを見せている。博物学的な多様な分野にまたがる仕事のひとつひとつは、いずれも今日から見ればアマチュア的な域を出ないとされるかもしれないが、パイオニアとし

ての業績は評価されるべきであり、礎石としての役割を明らかにするために今後の研究を継続したい。

３．研究の方法

国内外いずれにおいてもディキンズに関する先行研究はきわめて少ないなかで、研究方法は第一次資料の収集と検証という歴史研究の手法が基盤になる。ディキンズの活動や人となりに迫るにはサトウおよび熊楠と交わした書簡を始め、サトウ日記や書簡、熊楠の日記などでの言及を拾いあげる必要がある。またディキンズが委員を務めた日本アジア協会会報、編集長を務めた *The Japan Weekly Mail*、ロンドン大学事務長時代の執務記録、引退後のシーンドでの生活はアーカイヴに残る地方新聞などが資料となる。ロンドンの公文書館（PRO）蔵のサトウ文書、FO 文書、戸籍調査資料もまた重要な一次資料である。

資料の多くが一世紀以上も前に出版されたものであるが、手稿や書簡などを除けばデジタル・アーカイヴズでの入手が可能になっている。新聞などもデータベース化されているものもあり、検索機能によって効率的に調査が行える。本研究ではケンブリッジ大学図書館の Aoi Pavilion を中心として稀覯本・マニュスクリプト室などにおいて関連資料の収集を行った。

二次資料となるのはディキンズとの比較を可能にするあらゆる文献である。たとえばディキンズが全訳した『仮名手本忠臣蔵』については、先行するミットフォードによる『四十七士』との比較、その後のディキンズ自身による改編のプロセスの検証、ドナルド・キーン訳との比較検討は欠かせない基本作業であり、西洋における受容のあり方を探る上で、Kevin J. Wetmore, Jr. Ed. *Revenge Drama in European Renaissance and Japanese Theatre* (Palgrave Macmillan、2008)などが参考となったように、俯瞰的な視点が必要である。また、既述したように、現在大きな展開を遂げている比較文学研究や翻訳論からあらたな枠組を援用することも有効に思われる。

４．研究成果

ディキンズの日本文学翻訳は『百人一首—峰のかけはし』をスミス・エルダー社から 1866 年に出版したことに始まり、1912 年に 74 歳で六樹園飯盛『飛騨匠物語』の翻訳をゴワンズ社から出したのが最後であった。この間には『富嶽百景』、版を重ねた『仮名手本忠臣蔵』、『竹取物語』、『方丈記』、『万葉集』、その他の小品がある。今期は『竹取物語』『方丈記』『富嶽百景』を取りあげ論文にまとめた他、『万葉集』については研究を継続中である。

『竹取物語』は、B.A.チェンバレン『日本事物誌』にわずかな言及があるのみで、ディキンズはロンドンのトリューブナー社から 1888 年に全訳の初版を出している。その後、熊楠の助力をえて、初版から 18 年がたった 1906 年に改訂版を出版した。本研究では初版と改訂版を比較し、いかなる改変が行われたのかを検証し、熊楠の関与の程度を考察したほか、G・アストンの『日本文学史』中の抄訳との比較によって、ディキンズの翻訳の特徴を明らかにした。ディキンズ書簡および熊楠の日記の記述などから、改訂は 1897 年末から 1899 年 6 月までの一年半をかけて行われたものと推定され、訳文の修正に関しては、ディキンズは熊楠に対して微妙な解釈の確認や、詳細な注釈のための情報提供を期待していたことがわかる。熊楠をもっとも博識な日本人と評価したディキンズは、その後の翻訳に関し帰国後の熊楠とも親しく交流をもつことになる。

『方丈記』はディキンズが退職後に本格的に日本研究を再開したなかで、新たに着手し完成した翻訳である。翻訳は熊楠の下訳をディキンズが相当程度の修正を行った上で完成したことが、すでに小泉博一氏の研究等によって明らかにされているが、ディキンズが何を底本としてどのように修正を行ったのかはわかっていない。本研究では熊楠の下訳とディキンズの修正訳について、小泉氏の取りあげていない部分について比較検証を行った結果、ディキンズはきわめて大胆に修正を行い、一部には誤訳と思われるものが含まれていることが判明した。ディキンズが翻訳の修正にあたって使用した可能性のある版の特定を試み、交友のあった G・アストンが所有していた今泉定介校閲・上田胤比古注『方丈記：訂正標註』の可能性を示唆した。一方、熊楠が使用したのは『日本文学全書』中の「方丈記」であり、その解題が熊楠による「長明論」の資料となっていることが、その後の調査で確認された。

ディキンズの日本研究は幕末の長崎で『北斎漫画』を目にしたことから始まり、最後は北斎の挿絵をふんだんに載せた『飛騨匠物語』の翻訳で終わっている。『富嶽百景』の翻訳は 1860 年代の半ばに行われていたが、美術書を専門とするロンドンのバッツフォード社から出版されたのは 1880 年になっていた。ヨーロッパで起こったジャポニスムが英米に広まるまで時差があったのである。断片的にしか伝わっていなかった『富嶽百景』の全体を紹介したのはディキンズが最初であるが、飯島虚心の『葛飾北斎伝』もまだ刊行されていないなかで、ディキンズは『北斎漫画』の序文や『和漢三才図会』などを主な資料として解説を書いたことがわかる。ディキンズと日本美術研究者たちとの関係は興味深い。クリストファ・マルケ氏や稲賀繁美氏の研究にあるように 1871 年に横浜に向かう船のなかで、ディキンズはチェルヌスキとデュレとに出会っている。その後も交流があり、後にチェルヌスキ美術観に収められた「目黒大仏」に関する論文を書いたり、『富嶽百景』英訳を寄贈するなどの展開があった。フランスで浮世絵のブームを生んだサミュエル・ビング、ビュルティとも知遇があり、ウィリアム・アンダースン、ストレンジ、カットラーなどと行き来があり、イギリスにおける日本ブームにディキンズも深く関わっていたことがわかる。

ディキンズが『富嶽百景』を取りあげた理由は北斎の代表作というだけでなく、霊峰として崇拝されてきた富士山そのものへの地誌的あるいは博物学的関心も大きいことが解説から知られる。風景画の評価よりも富士の神話・伝説、江戸の風俗や民族的資料となる画題により多くの紙幅を割いているのである。またディキンズ自身の登頂体験を交えた紀行文的な記述も見られる。ディキンズの『富嶽百景』は美術作品という以前に、富士山のさまざまな姿を通して写し出される日本の歴史風俗を知る資料として興味をそそられたものと思われる。芸術家・北斎の名が世界的に知られている今日からみれば、美術には素人であったディキンズの解説はほとんど顧みられることはないかもしれないが、それでもこの本が北斎に関する最初の学術的な研究書であったことは心にとめておくべきものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岩上はる子	４．巻 51
２．論文標題 F.V.ディキンズ訳『方丈記』をめぐって-F.V.ディキンズと南方熊楠の関わりー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 英学史研究	６．最初と最後の頁 １－18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩上はる子	４．巻 6巻4号
２．論文標題 『嵐が丘』における時間の意味に関する考察	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ブロンテ・スタディーズ	６．最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩上はる子	４．巻 50
２．論文標題 『竹取物語』はいかに英訳されたかーF.V.ディキンズと南方熊楠の関わり	５．発行年 2017年
３．雑誌名 英学史研究	６．最初と最後の頁 3-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩上はる子	４．巻 10
２．論文標題 マリア・ルス号裁判はいかに伝えられたかーThe Japan Weekly Mail の報道を中心にー	５．発行年 2017年
３．雑誌名 関西英学史研究	６．最初と最後の頁 13-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩上はる子	4．巻 52
2．論文標題 F.V.ディキンズと葛飾北斎ー『富嶽百景』を中心にー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 英学史研究	6．最初と最後の頁 63-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩上はる子	4．巻 6巻4号
2．論文標題 『嵐が丘』における時間の意味に関する考察	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ブロンテ・スタディーズ	6．最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 岩上はる子
2．発表標題 F.V.ディキンズ訳『方丈記』をめぐって
3．学会等名 日本英学史学会
4．発表年 2017年

1．発表者名 岩上はる子
2．発表標題 ブロンテ文学の現在を展望する
3．学会等名 日本ブロンテ協会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 岩上はる子
２．発表標題 ジェイン・オースティンは「世界文学」たりえるか
３．学会等名 ジェイン・オースティン協会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 岩上はる子・惣谷美智子（共編著）	４．発行年 2019年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 419(掲載頁：5-12,139-155)
３．書名 めぐりあうテクストたちーブロンテ文学の遺産と影響	

１．著者名 岩上はる子（分担執筆）	４．発行年 2017年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 436（掲載頁：298-316）
３．書名 文学都市ダブリン（第14章　エドナ・オブライエン）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考